

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ:ニュース・レターNo.60 (2019年2月号)◆

早いもので、暦の上では立春を過ぎ、少しずつ春の訪れが感じられる時期となりました。会員の皆さまが健やかにお過ごしのことをご願っております。2月の研究会はおやすみですが、その後、3月30日、そして4月は19-20日に英国ベルファストのクイーンズ大学の研究者との合同シンポジウムを開催する予定です。詳細はまたご連絡いたしますが、どうぞご予定下さい。Facebookでも情報を発信しておりますので、どうぞご覧下さい。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。会員向けブログでのエッセイは、すでに第29回を重ねており、藤元直樹さん、天野知幸さんをはじめ、いろいろな方の研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【第125研究会】(1月26日(土)14時30分～17時30分)

- エリック・シリック(カリフォルニア大学ロスアンゼルス校アジア言語文化学部博士後期課程)  
「プランゲ文庫所蔵の岩手地方雑誌——検閲書類と事後検閲を巡って」は、占領期に東北地方で刊行された雑誌を分析し、第一には、プランゲ文庫の雑誌に添付されている各種検閲文書を分析することで従来の検閲研究をより緻密なものとする、第二に、先行研究にみるように、占領期の事後検閲の多くはその効果が少なかった可能性が高いことを示し、一地方に限定されない占領期の検閲制度のありかたを考察した。
- 小野耕世(東京工芸大学芸術学部客員教授)  
『君たちはどう生きるか』と「日本少国民文庫」(新潮社刊)の変遷  
漫画版が話題になっている吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』が、最初に刊行された1935年版の「日本少国民文庫」から戦後の1957年刊行の「新編・日本少国民文庫」まで、四種類の叢書を比較し、この原作が繰り返し発行され続けてきた背景を考察していただきました。

●3月以降の20世紀メディア研究会の開催予定は、3月30日(土)、4月19-20日(土・日)[日英国際シンポジウムの予定]、5月11日(土)、6月29日(土)に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 [m20th@list.waseda.jp](mailto:m20th@list.waseda.jp) まで、メールにてご一報下さい。

【コラム】金志映『日本文学の〈戦後〉と変奏される〈アメリカ〉』(ミネルヴァ書房)を読む

長く出版が待たれていた気鋭の比較文学研究者の博士論文がようやく上梓された。著者を迎えて広島大学でワークショップが開かれ、私はコメンテーターとして出席した。本書は、ロックフェラー財団の作家フェローシップを受けてアメリカに招聘された文学者たち—江藤淳が有名だが、他にも小島信夫、庄野潤三、有吉佐和子、安岡章太郎、石井桃子、福田恒存、大岡昇平、阿川弘之ら錚々たる面々が招かれている。ロックフェラー財団が公開する作家フェローシップ関連文書を解読し、文化冷戦期における日

本文学のアメリカ表象に焦点を当てて分析した大著である。インテリジェンス研究の見地からは、特に渡米前の阿川弘之が重要な文学のテーマとしていた原爆被害について、財団文書中に「核開発のネガティブな側面だけではない情報を与える必要がある」(つまり原子力の平和利用言説など)等のメモがあること、結局帰国後の阿川が原爆モチーフの追求を断念したことなど、興味深く読ませる。作家フェローシップの日本側コーディネーターである坂西志保とは何者だったのか、更なる研究意欲が刺激される。著者は本書の後、国務省の支援で渡米した火野葦平の研究を進めているという。

また、東京大学での留学生時代、20世紀メディア研究会を聴講したことがあり、『Intelligence』への寄稿を考えたこともあった、「やっとお会いできました」という研究者冥利につきる言葉もいただいた。文学とインテリジェンスの国際的学際的研究が若い世代に広がりつつあることを心強く思う。

[2月25日付 文責:川崎賢子]